

ギュスターヴ・フローベール『感情教育』における フィクションとしての制度と言説について

久保田 斉 也

1. フィクションとしての制度

『感情教育』と題される小説が繰り広げられる舞台は、1848年2月に勃発した二月革命を中心にした、その七月王政末期から第二帝政の時代におよぶ。フローベールが、『感情教育』を構想しているその頃、友人あての手紙のなかで、「同時代の精神史」を書きたいと考えている旨を伝えているが⁽¹⁾、その「精神史」のなかには、この小説の射程のひとつである政治的テーマが含まれている。この政治的テーマは、おもに二月革命をめぐる展開していくことになるのだが、その際、この小説に登場してくる人物たちは、主に共和派と保守派の人物とに、大きく分けることが出来る。しかし、ここで注意しておきたいことは、共和派と保守派の人物が織りなす二つの陣営は、その主義主張において画然と区別されていたのではなく、流動的であったという点である。二月革命が始まる以前から、こうした流動的な事態が起こっていたのであり、その一断面を、フローベールは次のように書き記している。

[...] Un propriétaire disait :
 ---- C'est une classe d'hommes qui rêve du bouleversement de la société !
 ---- Ils demandent l'organisation du travail ! reprit un autre. Conçoit-on cela ?
 ---- Que voulez-vous ! fit un troisième, quand on voit M. De Genoud donner la main au *Siècle*.
 ---- Et des conservateurs, eux-mêmes, s'intituler progressifs ! Pour nous amener, quoi ? la République ! Comme si elle était possible en France !
 Tous déclarèrent que la République était impossible en France⁽²⁾.

(……) ひとりの経営者が言った。

(1) Gustave Flaubert, *Correspondance*, vol.III, à Mademoiselle Leroyer de Chantepie, 6 octobre 1864, édition, établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1991, p. 409.

(2) Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Édition de Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche, Les Classiques de Poche, 2009, pp. 257-258.

「社会の転覆を夢んでいるのが、世間の一階層をなしているんですよ！」

「そいつらが労働の組織化を要求しているんです」と別の同類。「あきれた話だ！」

「何を望んでいるのですか」ともうひとり、「なにしろジュヌード氏が『世紀』に手を貸すご時世なんだ」

「そう、保守派たちまでが進歩派を名乗るご時世なんです。われわれを導くためというが、要するにそれは、共和制なんだ！あたかもフランスに共和制が可能であるかのようにね！」⁽³⁾

このように、二月革命が起こる前、革命を求める気運に押されてか、保守派から進歩派・共和派へと境界をまたぐ人が増えていたのであり、事態は流動的な様相を呈していた。ところが、二月革命が起こり、民衆・労働者たちは、自分たち自らの開放という夢の実現を希求していたのだが、実情はそのように進展することはなく、民衆・労働者の間に不満が形成されることになり、やがてその不満が噴出し、二月革命が勃発したその年の六月に、六月暴動が起きることとなる。そして、この六月暴動を境に、またしても保守派と共和派という二つの陣営が流動的となり、共和派の唱える言説と保守派の唱える言説とが通底するという事態がおこりつつあったのである。

この共和派の言説と保守派の言説の通底という事態は、例えば、新たなる時代の導き手としての「民衆」に期待し、革命を夢んでいた共和主義者のセネカルに見て取ることができ、二月革命、六月暴動を経て、民衆の動きを垣間見たそのセネカルは、自身の見解を次のように述べている。

[...] Sénecal se déclara pour l'Autorité ; et Frédéric aperçut dans ses discours l'exagération de ses propres paroles à Deslauriers. Le républicain tonna même contre l'insuffisance des masses.

---- Robespierre, en défendant le droit du petit nombre, amena Louis XVI devant la Convention nationale, et sauva le peuple. La fin des choses les rend légitimes. La dictature est quelquefois indispensable. Vive la tyrannie, pourvu que le tyran fasse le bien !⁽⁴⁾

(……) セネカルは権力に味方すると宣言した。そしてフレデリックは、セネカルの言葉のなかに自分がデローリエに言ったことが誇張されていると気づいた。この共和主義者は大衆の無能を激しく非難さえした。

「ロバスピエールは少数者の権利を擁護して、ルイ16世を国民公会の前に連れて行き、そして民衆を救った。目的が手段を正当化する。独裁が絶対に必要なときだってあるんだ。独裁者が善いことをなすなら、独裁制も万歳だ！」

(3) 当論考における『感情教育』の訳は、自らの拙訳である。以下同様である。

(4) Flaubert, *Op.cit.*, pp. 551-552.

このように、セネカルの場合において、ひとりの共和主義者の言説が、権力を志向し、「民衆」の無能さを指摘し、独裁制をも擁護する点において、保守派の言説と通じ合うという状況が生じているさまを窺うことができる。この教条的な共和主義者のセネカルは、ついには、ルイ・ボナパルトの第二帝政の権力そのものとしての警官となり、友人のデュサルディエを殺害するに至るのである。

二月革命を通して、保守派から進歩派へという流れ、そして六月暴動を通過しての共和派の言説と保守派の言説の通底という流れを経て、民衆への嫌悪、そして秩序を求める声が沸き起こることになる。そうした状況を、フローベールは、次のように書いている。

Les uns désiraient l'Empire, d'autres les Orléans, d'autres le comte de Chambord ; mais tous s'accordaient sur l'urgence de la décentralisation, et plusieurs moyens étaient proposés, tels que ceux-ci : [...] Les haines foisonnaient : haine contre les instituteurs primaires et contre les marchands de vin, contre les classes de philosophie, contre les cours d'histoire, contre les romans, les gilets rouges, les barbes longues, contre toute indépendance, toute manifestation individuelle ; car il fallait « relever le principe d'autorité », qu'elle s'exerçât au nom de n'importe qui, qu'elle vînt de n'importe où, pourvu que ce fût la Force, l'Autorité ! Les conservateurs parlaient maintenant comme Sénecal. Frédéric ne comprenait plus ;⁽⁵⁾

帝政を望む者もいれば、オルレアン家を望む者も、シャンボール伯を望む者もいる。しかし、地方分権化の体制を緊急に進めなければならないと認める点では、誰の意見も一致していたし、その方策もいくつか提案されていた。(……) 憎しみの感情が蔓延していた。小学校教師に対する憎しみ、酒屋に、哲学者に、歴史の授業に、小説に、赤いチョッキに、長いひげに、すべての独立不羈なものにたいする憎しみ、あらゆる個性の表明に対する憎しみである。というのも、「権力というものの原則を立てなおす」必要があったからであり、それがどんな名において行使されようと、どこから下されようとかわらない、「力」であり「権威」でありさえすればいいのだ！保守主義者たちが今やセネカルと同じようなことを話していた。フレデリックは、もはや理解できなかった。

知識人、労働者、共和派、保守派を問わず、あらゆるものに対する「憎しみ」が蔓延している状況のなかで、保守主義者の言説と共和主義者の言説が通底している錯綜した言説の場が形成され、そこで、「権威」そして秩序・「力」が求められる。そしてその「権威」と「力」は、「どんな名において行使されようと、どこから下されようとかわらない」のであり、このような状況か

(5) *Ibid.*, pp. 576-577.

ら、あからさまに指摘されてはいないが、ルイ・ボナパルトの1851年12月2日のクーデターが生まれ、ルイ・ボナパルトが皇帝として承認されるに至る過程がほのめかされているのである。

ところで、このように、フローベールが浮上させた錯綜した言説の場の指摘と、その陰画のように立ち現われる皇帝ルイ・ボナパルトの誕生の暗示は、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』における代表制をめぐる分析と関連するものを持っている。では、ルイ・ボナパルトの事例における、マルクスの代表制をめぐる分析とはどのようなものなのか。

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

マルクスが、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』において注目した重要なことは、いくつもの言説が飛び交うなかで、二月革命からルイ・ボナパルトが皇帝に就任するに至る過程を、議会制のなかに見出していることである。1848年の二月革命は、王政を廃止し、第二共和制のもとではじめて普通選挙をもたらした。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、このはじめてもたらされた普通選挙によって、そしてブルジョワ議会制のなかで、ルイ・ボナパルトが皇帝に就任したという事実である。マルクスは、こうした事態の進展の背後に、さまざまな階級とその闘争が機能していることを指摘しているが、しかしそのなかにあつて注目しなければならないことは、この一連の過程が、経済的基盤から独立して進行していったという事態であり、そして、この事態においていかに事柄が進展していったのかを、マルクスは解明しようとした。その際に、マルクスが焦点をあてたのは、議会制である。普通選挙にもとづく議会は、身分制議会とは異なり、「代表するもの」と「代表されるもの」との間には必然的つながりはなく、恣意的なものにすぎないことを、マルクスは見抜いていた。二月革命を経てルイ・ボナパルトが皇帝に就任するという事態は、経済的基盤から独立した、「代表するもの」と「代表されるもの」の間における関係の恣意性によってもたらされることとなり、当時飛び交っていたさまざまな錯綜した言説は、経済的基盤からも自立し、浮遊することになる。マルクスは、「代表するもの」と「代表されるもの」の間に形づくられる関係の恣意性を、次のように説明している⁽⁶⁾。

同様に民主派の議員たちはみな商店主であるか、あるいは商店主を熱愛している、と思いついて描いてもいけない。彼らは、その教養と知的状態からすれば、商店主とは雲泥の差がある。彼らを小市民の代表にした事情とは、小市民が実生活において超えない限界を、彼らが頭のなかで超えない、ということであり、だから物質的利害と社会的状態が小市民を[実践的に]駆り立てて向かわせるのと同じ課題と解決に、民主派の議員たちが理論的に駆り立てられ

(6) ここにおける考察は、柄谷行人の論考、『定本 柄谷行人集5 歴史と反復』（岩波書店、2004年）に収められている「第1部 歴史と反復 第1章 序説——『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』」に多くをおっている。

る、ということである。これがそもそも、ひとつの階級の政治的・文筆的代表者と彼らが代表する階級との関係というものである⁽⁷⁾。

このように、「代表するもの」(引用においては「民主派」と「代表されるもの」(引用においては「商店主」と)の間に形づくられる関係の恣意性によって、当時の諸階級は、いままでの自らを「代表するもの」をあきらめ、ルイ・ボナパルトを選び承認するという事態が起こることとなる。この一連の政治的過程は、単なる「階級闘争」に焦点をあてただけでは解明されえず、むしろ、代表制の機能そして経済的基盤から自立している言説の機能に焦点をあてることによって解明されるのであり、そこで重要なのは、その言説の場を通じてのみ、それぞれの立場が意識されるということなのである。

そして、自らの代表者を持ちえず、そのために誰かに代表してもらわなければならない徴候的な一階級を、マルクスは指摘している。分割地農民が、それである。

(……) 分割地農民はひとつの階級をなす分割地農民の間には局地的な関連しか存在せず、彼らの利害の同一性が、彼らの間に連帯も、国民的結合も、政治的組織も生み出さないかぎりでは、彼らは階級を形成しない。だから彼らは、自分たちの階級利害を、議会を通してであれ、国民公会を通してであれ、自分自身の名前で主張することができない。彼らは自らを代表することができず、代表されなければならない。彼らの代表者は、同時に彼らの主人として、彼らを支配する権威として現われなければならない、彼らを他の諸階級から保護し、彼らに上から雨と日の光を送り届ける、無制限の統治権力として現われなければならない⁽⁸⁾。

普通選挙にもとづく議会制における特徴である、「代表するもの」と「代表されるもの」の間関係の恣意性によって、ひとつの「主人」として、「権威」として、そして「無制限の統治権力」として、ルイ・ボナパルトの存在が希求されているさまを、この引用に窺うことができる。つまり、「代表するもの」の不在としての空位を、全面的に「無制限の統治権力」としてルイ・ボナパルトが埋めることになるのである。実際、ルイ・ボナパルトは、クーデターを起こし、皇帝に就任するに至る。

このように、「代表するもの」と「代表されるもの」の間に形づくられる関係の恣意性と、言説の自立性という観点へて、マルクスは、二月革命からルイ・ボナパルトが皇帝に就任するに

(7) 植村邦彦訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日 [初版]』、平凡社、平凡社ライブラリー649、2008年、67～68頁。

(8) 同上、178頁。

至る事態を分析した。そして、このマルクスの分析はまた、フローベールの記述、つまり、「憎しみ」の時代にあつて、保守派と共和派の言説の通底という自立し錯綜した言説の場をとおして、「権威」・「力」が求められるという記述と、遠く補完し合っているさまを窺うことができるだろう。

つまり、「代表するもの」と「代表されるもの」との間に横たわる関係の恣意性により生まれる「穴」を、ルイ・ボナパルトが塞ぐことになることをマルクスは指摘し、その一方でまた、二月革命と六月暴動という歴史的出来事を経て、保守派と共和派両陣営の言説が通底し、憎しみがひろがり、そこにおいて、「だれの名において行使されようとかまわない、どこから下されようとかまわない、「力」であり「権力」が希求され、ルイ・ボナパルトが皇位に着くことになる状況をフローベールは記述することになる。マルクスの指摘とフローベールの記述は、ルイ・ボナパルトの皇帝就任という一連の出来事を、それぞれの視点において透視しながら、なおも補完し合っているのである。

「憎しみ」という抑圧的な時代、普通選挙にもとづく代表制のなかで、二月革命によっていったん追放された「権威」が、あたかも「穴」を覆うかのように、さらに反復的により強く希求されるに至るのである。

「国民主権」と「平等」

『感情教育』における、二月革命と六月暴動という流動的な一時期の記述において、さまざまな言説がたち現われており、その言説のなかには、いくつものスローガンが据えられている。それらスローガンは、民主主義であり、平等、共和制であり、民衆、普通選挙などであるのだが、これらスローガンのなかにまた、国民主権という言葉も並んで登場してくることになる。この国民主権という言葉をめぐるのひとつの見解が、登場人物のひとりであるデローリエによって語られる場面がある。その場面を、見てみることにしよう。

[...] Pas un [=un gouvernement] cependant n'est légitime, malgré leurs sempiternels principes. Mais, *principe* signifiant *origine*, il faut se reporter toujours à une révolution, à un acte de violence, à un fait transitoire. Ainsi, le principe du nôtre est la souveraineté nationale, comprise dans la forme parlementaire, quoique le parlement n'en convienne pas ! Mais en quoi la souveraineté du peuple serait-elle plus sacrée que le droit divin ? L'un et l'autre sont deux fictions ! Assez de métaphysique, plus de fantômes ! Pas n'est besoin de dogmes pour faire balayer les rues ! On dira que je renverse la société ! Eh bien, après ? où serait le mal ? Elle est propre en effet, ta société !⁽⁹⁾

(9) Flaubert, *Op.cit.*, p. 282.

「(……) しかしその政府はといえば、切りのない原則を唱えはするが、正当性をもつものではない。しかし、「プランシップ」は同時に「根源」の意味でもあるのだから、根源に立ち返るためにはつねに革命を、暴力行為を、過渡的現象を参照しなければならない。そうすると、わが国の政府にとってのプランシップは、議会制の形態において理解された国民主権だろう。もっとも議会はそんなことは認めないと思うけどね！それはそうと、国民主権が神権よりも神聖不可侵なるべき理由はどこにある？どちらにしたって虚構だよ！形而上学はもうたくさんだ、幻想はやめにくれ！街路清掃させるのにドグマはいらない！僕が社会を覆すというのか！それでどうした？覆して何が悪い？まったく、現在の社会なんてそれに適しているよ！」

第二部第三章に、この引用の個所は出てくるのだが、この引用で注目しなければならないのは、「国民主権」という制度が、「神権」という制度よりも尊重されねばならない理由などどこにもなく、「神権」にしる「国民主権」にしる、どちらも「虚構」にすぎないのではないか、つまり、「国民主権」という制度の正当性を保証し、また根拠づける原理などどこにも存在しない、ということである。ここには、制度とは「虚構」である、というフローベールの認識を見て取ることができ、「国民主権」はひとつの制度であり、その点において、「虚構」性を逃れることはできないのである。ここで確認しておきたいことは、「国民主権」をはじめとするあらゆる制度が「虚構」性を免れることはできないということは、制度の不必要性を述べているということではまったくないということである。そうではなくて、制度は制度として社会において機能し、ときに事柄を円滑に進展させてゆく役割を果たすものであるが、その円滑に機能する制度そのものは、その制度の正当性をもたらす絶対的な根拠というものを欠いているということなのである。フローベールは、制度の不必要性を述べているのではなく、制度そのものが正当性をもたらす根拠を欠いたものであるという点を、指摘しているのだ。

「国民主権」という制度についていえることはまた、民主主義や平等、普通選挙や共和制といった制度についても言うことができるのではないか。つまり、制度は、それ自体において、自らを根拠づける正当性などどこにも存在しないのであり、制度は制度として機能しはするものの、自らを根拠づける正当性の不在による、一抹のフィクション性を免れることはできないのではないか。その点において、フローベールにより、制度というものの自明性が疑問に付されることになり、制度の「虚構」性が常に意識されることになるのである。

そして、共和制というひとつの原則のもとでの平等というスローガンについて、そして平等という言葉の現実におけるたち現われについて、フローベールは、ルイーズ・コレに宛てた手紙のなかで、次のように語っている。

Cette manie du rabaissement dont je parle est profondément française, pays de l'égalité et de l'anti-liberté. Car on déteste la liberté dans notre chère patrie. L'idéal de l'état, selon socialistes, n'est-il pas une espèce de vaste monstre absorbant en lui toute action individuelle, toute personnalité, toute pensée, et qui dirigera tout, fera tout ? Une tyrannie sacerdotale est au fond de ces cœurs étroits : « Il faut tout régler, tout refaire, reconstituer sur d'autres bases », etc. [...] Je trouve que l'homme, maintenant, est plus fanatique que jamais. Mais de lui. [...] L'infaillibilité du suffrage universel est prête à devenir un dogme qui va succéder à celui de l'infaillibilité du pape.--- La force du bras, le droit du nombre, le respect de la foule a succédé à l'autorité du nom, au droit divin, à la suprématie de l'Esprit. [...] Qu'est-ce donc que l'égalité si ce n'est pas la négation de toute liberté, de toute supériorité et de la Nature elle-même ? L'égalité, c'est l'esclavage. Voilà pourquoi j'aime l'art⁽¹⁰⁾.

僕が話している貶めることへのこの偏執は、根底的にフランス的なもの、平等と反自由の国のものです。というのも、わが祖国では自由は嫌われているのですから。国家の理想とは、社会主義者たちに言わせれば、あらゆる個人的な行動、すべての人格、すべての思想をみずからのうちに吸収してしまい、そしてすべてを指導し、すべてを執り行う一種の巨大な怪物なのではないのだろうか？司教のような専制がこれらの狭い心の奥底にはある、「すべてを規制しなければならない、他の基盤に基づいていっさいを作り直し、再建しなければならないのだ」云々。(……)人間が今やこれほど狂信的であったことはないと思います。が、この狂信は人間自身に向けられているのです。(……)普通選挙の絶対無謬性は、ひとつの^{ドグマ}教義となり、教皇の絶対無謬性の教義の後に続こうとしています。働くものの力、多数の権利、大衆への敬意が、家柄の権威や神権、精神の至高性の後を継ごうとしています。(……)平等があらゆる自由や卓越したものの否定、自然そのものを否定するものではないとしたら、いったい平等とは何なのでしょう？平等、それは隷属のことです。だからこそ、ぼくは芸術を愛するのです。

この引用において窺われるように、「平等」というスローガンからたち現われてくる「普通選挙の絶対無謬性」というものは、「教皇の絶対無謬性」と同じように、フィクション性を忘れ去られたひとつの制度、つまり「^{ドグマ}教義」にすぎないということを、フローベールは指摘している。そして、この「普通選挙」の位置には、「働くものの力」、「多数の権利」そして「大衆への敬意」が据えられることになり、これらもまた、「家柄の権威」や「神権」というひとつの信じ込まれたフィクションの後に続いてやってくる、もうひとつのフィクションに過ぎないことを、フローベールは感づいている。「平等」というスローガンのもとにたち現われて形成される言説は、ひ

(10) Gustave Flaubert, *Correspondance*, vol.II, à Louise Colet, 15-16 mai 1852, édition, établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 2008, pp. 90-91.

とつ^{ドグマ}の「教義」であり、つまり、ひとつの物語であり、フィクション性をまとわざるを得ない言説である。そして、そうした言説が、そのフィクション性を忘れ去られ自明なものとして信じ込まれている時代に対し、フローベールは、鋭い視線を送り続けていたのである。

これまで、二月革命期の錯綜している言説の場を点検し、そこから「権威」そして「力」が希求されるさまを確認し、それとの関連で、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を垣間見、そして、「国民主権」そして「平等」というスローガンを中心に、制度のフィクション性を指摘してきた。

ここで確認にはなるが、政治的制度のほころびにおいて、あたかも「穴」を覆うかのように、「権威」が求められるということは、ひるがえって、制度のほころびである危機において、「穴」がたち現われ、制度のフィクション性が強く意識される、ということもできる。

制度の危機において露呈する制度のフィクション性と同様に、二月革命のさなか、さまざまな政治クラブにおいて飛び交う言説のインフレーションにおいて、意味の危機が生起し、そこにおいてあらゆるものが紋切型と化してしまい、言説のフィクション性が意識されるに至る。その言説のフィクション性とは、どのようなものなのか。

2. フィクションとしての言説

『感情教育』において、さまざまな言説が交差しているが、そのなかでもとりわけ政治的場面における言説に焦点をあててみたいと思う。その政治的場面とは、第3部第1章で描かれることになる政治クラブについてである。政治クラブとは、二月革命が起こると、政治に興味を持ち立場を同じくするものたちが集まり、意見を述べ課題を論じ合う場のことである。

政治クラブ

二月革命が起こり、普通選挙が施行されることになると、主人公フレデリックは、周囲からの促しもあり、進歩的共和派という立場から、議員に立候補しようとしていた。そのため、立候補の承認を得ようと、さまざまな政治クラブに立ちよっては、自分にふさわしい政治クラブを探していた。それら政治クラブには、いったいどのようなクラブが存在していたのか、それらクラブを、フローベールは記述している。

Ils [=Frédéric et Delmar] les [=les clubs] visitèrent tous, ou presque tous, les rouges et les bleus, les furibonds et les tranquilles, les puritains, les débraillés, les mystiques et les pochards, ceux où l'on décrétait la mort des rois, ceux où l'on dénonçait les fraudes de l'épicerie;⁽¹¹⁾.

(11) Flaubert, *Op. Cit.*, p. 448.

ふたりは、すべて、およそクラブを、ほとんど全部見てまわり、それらは、赤いクラブ、青いクラブ、怒り狂ったクラブ、穏健なクラブ、清教徒的なクラブ、だらしのないクラブ、神秘的なクラブ、酔っぱらいのクラブ、あるいは王の死を宣告しているクラブ、あるいは食料品業者のいんちきを告発しているクラブ、といった具合である。

ここに列挙されたクラブを見てみると、片方の極からもう片方の極までと、上下左右を覆うかたちでクラブが乱立しているさまを窺うことができるのだが、それほど事態は流動的であった。ところで、これら乱立している政治クラブにおいて、いったい何が語られ、行われていたのか。フローベールは、このように続ける。

; et, partout, les locataires maudissaient les propriétaires, la blouse s'en prenait à l'habit, et les riches conspiraient contre les pauvres. Plusieurs voulaient des indemnités comme anciens martyrs de la police, d'autres imploraient de l'argent pour mettre en jeu des inventions, ou bien c'étaient des plans de phalanstères, des projets de bazars cantonaux, des systèmes de félicité publique ; --- puis, çà et là, un éclair d'esprit dans ces nuages de sottise, des apostrophes, soudaines comme des éclaboussures, le droit formulé par un juron, et des fleurs d'éloquence aux lèvres d'un goujat, portant à cru le baudrier d'un sabre sur sa poitrine sans chemise. Quelquefois aussi, figurait un monsieur, aristocrate humble d'allure, disant des choses plébéiennes, et qui ne s'était pas lavé les mains pour les faire paraître calleuses. Un patriote le reconnaissait, les plus vertueux le houspillaient ; et il sortait, la rage dans l'âme. On devait, par affectation de bon sens, dénigrer toujours les avocats, et servir le plus souvent possible ces locutions : « apporter sa pierre à l'édifice, --- problème social, --- atelier »⁽¹²⁾.

そして、いたるところで、借地借家人は地主家主を呪い、仕事着は燕尾服を責め、金持ちは貧乏人を倒そうと共謀していた。警官による昔のひどい仕打ちの代償として賠償金を要求している者がいるかと思うと、もろもろの発明を実際に移すために資金を懇願している者もいたし、あるいはまた、ファランステールの計画だとか、郡市場の計画、大衆福祉の制度などが持ち出されることもあった。——そして、そこかしこで、こういう愚かさの霞をぬって機知のきらめきが走り、荒々しい言葉が突然ほとばしりであり、ののしりの言葉で法律が口にされたり、シャツを着ない裸の胸にサーベルの肩革をじかにかけて無礼者の口から、雄弁の花が咲いたりした。またときには、へりくだった物腰の貴族である紳士が現われ、庶民のひ

(12) *Ibid.*, p. 448.

とりであるかのようなことを口にしたのだが、この紳士は、たこができてるように見せかけるため、手を洗わずにいたのである。ひとりの愛国者が彼をみやぶり、道義感にあふれた連中が彼を激しく非難した。そして紳士は憤怒を胸に、その場を立ち去った。良識が持ち合わせる熱意にうながされて、弁護士たちを中傷しなければならなかったり、「社会という建造物に自分の石を寄与する——社会的問題——作業場」などといった言い回しをできるだけ口にしなければならない雰囲気だった。

さまざまな政治クラブが乱立し、そこにおいてそれぞれの主張がなされているかと思えば、「いたるところで」なされるのは、「借地借家人」の「地主家主」への、「仕事着」の「燕尾服」への、「金持ち」の「貧乏人」への、階級的齟齬感にとまなう不満であり、さらには、「警官」への賠償金請求、発明の実用化に向けての資金要求、また、「ファランステール」や「郡市場」や「大衆福祉」の計画といった、当時流通していた社会主義的理想の現実化へ向けての話題であり、どこにおいても、さまざまな政治クラブの立場の個性が際立つということとは程遠く、繰り返されるのは、「いたるところ」で繰り返される紋切型ばかりなのである。実際、こうした紋切型が繰り返される「愚かさ」のなかにあって、人々は、良識の徒らしく装おうとし、こぞって弁護士の批判を繰り返し、「社会という建造物に自分の石を寄与する——社会的問題——作業場」という紋切型を連呼しなければならなかった、そして、そうした紋切型を口にしなければならぬ「雰囲気」が蔓延していたのである。

「知性クラブ」

このように、政治クラブとは、紋切型が流通し蔓延する場であるのだが、フレデリックは、さまざまな政治クラブを探し回った後、友人のデュサルディエの導きで、「知性クラブ」と名付けられた政治クラブたどり着く。このクラブにおいてもまた、紋切型の蔓延を垣間見ることができるのである。

この「知性クラブ」の参加者たちは、簿記係を務めている男、葡萄酒の仲買人、建築家、芸術家、復習教師、司祭にして農学者、石工、無名の文士など多種多様であり、やがて、このクラブのなかにおいて、クラブ独自の議員への立候補者を選出することになるのだが、この場面において、紋切型の蔓延と言説のインフレーションとを窺うことができるだろう。フローベールは書いている。

Un homme en soutane, crépu, et de physionomie pétulante, avait déjà levé la main. Il déclara, en bredouillant, s'appeler Ducretot, prêtre et agronome, auteur d'un ouvrage intitulé « *Des engrais* ». On le renvoya vers un cercle horticole.

Puis un patriote en blouse gravit la tribune. Celui-là était un plébéien, large d'épaules, une grosse figure très douce et de longs cheveux noirs. Il parcourut l'assemblée d'un regard presque voluptueux, se renversa la tête et enfin, écartant les bras :

---- Vous avez repoussé Ducretot, ô mes frères ! et vous avez bien fait, mais ce n'est pas par irrégion, car nous sommes tous religieux.

Plusieurs écoutaient la bouche ouverte, avec des airs de catéchumènes, des poses extatiques.

---- Ce n'est pas, non plus, parce qu'il est prêtre, car nous aussi, nous sommes prêtres ! L'ouvrier est prêtre, comme l'était le fondateur du socialisme, notre Maître à tous, Jésus-Christ !

Le moment était venu d'inaugurer le règne de Dieu ! L'Évangile conduisait tout droit à 89 ! Après l'abolition de l'esclavage, l'abolition du prolétariat. On avait eu l'âge de haine, allait commencer l'âge d'amour.

---- Le christianisme est la clef de voûte et le fondement de l'édifice nouveau...

---- Vous fichez-vous de nous ? s'écria le placeur d'alcools. Qu'est-ce qui m'a donné un calotin pareil !

Cette interruption causa un grand scandale. Presque tous montèrent sur les bancs, et, le poing tendu, vociféraient :⁽¹³⁾.

スータンを着、ちじれ毛で意気込んだ顔をした男が、すでに手を挙げていた。彼は早口で、自分はデュクルトという名で司祭にして農学者、『肥料』という本の著者であると明言した。園芸サークルに、この男は追い払われてしまった。

それから、仕事着を着けた愛国者が壇上にはい上がった。これは庶民のひとり、肩幅はひろく、大きな顔が非常に柔和で、長い黒髪だ。彼は、官能的ともいえそうな視線で一同を見渡し、頭をのけぞらせ、それから両腕を広げると、

「兄弟たち、諸君はデュクルトを追い払った！君たちは善いことをした、けれどもこれは無信仰のためではない、なぜならわれわれはみな、信心深いからだ！」

多くの者は口をぽかんとあけ、公教要理の受講者めいて、うっとりとしたかたちで聞きいていた。

「というのも、彼が聖職者であるためでもないはずだ、なぜなら、われわれ、われらもまた司祭だからだ！労働者は司祭である、社会主義の創始者、われわれみんなの主、イエス・キリストがそうであったように！」

神の支配が始まるべき時が来たのだ！福音書はまっすぐ89年へつながっている！奴隷廃止

(13) *Ibid.*, pp. 452-453.

のつぎはプロレタリアの廃止だ。かつては憎しみの時代であった、これから愛の時代が始まろうとしている。

「キリスト教は、新しい建物の穹窿のかなめ石でありそして土台である……」

「おれたちをばかにする気か？」と葡萄酒仲買人が叫んだ、「だれが、こんな坊主をよこしたんだ！」

この妨害で、ひどい騒ぎが起こった。ほとんど全員がベンチの上にあがり、そして、拳を突き出してわめきだした。

このように、立候補者は自らの言説を唱え始めたら始めたで、他の誰かに批判され否定され、その次の立候補者も自らの言説をまた批判され否定され、その都度、言説は中断を余儀なくされてしまう。さらに、この引用に登場する立候補者のひとは、「官能的ともいえないような視線で一同を見渡し、頭をのけぞらせ、それから両腕を広げる」という姿勢をとるのだが、その姿勢はまさに、壇上で人々に演説をする際のひとつの「ポーズ」であり、まさにひとつの紋切型なのである。またこの愛国者は、社会主義とキリスト教徒の親和性を前提とした、当時流布していた社会主義の言説を声高に主張するという、これもまたひとつの紋切型を意識することなくなぞることになる。紋切型の姿勢で紋切型の言説を唱えるという二重の紋切型の振る舞いもまた、中断を余儀なくされることになる。その中断のあとさらに、新たな言説が加わることになるのだが、その言説であっても、ひとつの有意義な見解へと導かれることなく、途中で切断されてしまい、言説が折り重なりあっていく。

「知性クラブ」での、選挙への立候補を選出する場面における、こうした言説のインフレーションは、まだ続く。その場面を要約すると、次のようになるだろう。

葡萄酒仲買人による「坊主」への批判のあと、葡萄酒仲買人は、信仰をなくしてしまえば経済はうまく行くという言説を唱えることになるのだが、その見解はすぐさま、行き過ぎだと、別の誰かに批判され、その批判の際に石工の比喩が持ち出されると、今度はその場に居合わせた石工が叫び散らす。「坊主」であるところの労働者は、依然、壇上を降りようとはせず、「諸君におれの叫びを止めることはできないぞ。わが愛するフランスに永遠の愛を！そして、共和国に永遠の愛を！」と叫ぶ。そのとき、ルジャンバールの知り合いであるコンパンが、「市民諸君！」という言葉を何度も繰り返し、謎の言葉である「子牛の頭」を連呼する。が、だれにも理解されず抱腹絶倒され、身を引かざるを得ないところに、ペルランが芸術関係の立候補を求めたところ、他の誰かが、芸術なんてものは関係ない、問題なのは、「政府はとっくに政令を出して、売春と貧困を根絶していて然るべきではなかったのか？」と口にし、税金の話から役者に支払われる高給について話題が及ぶと、役者のデルマールは、こう叫ぶ。

---- À moi ! s'écria Delmar.

Il bondit à la tribune, écarta tout le monde, prit sa pose ; et, déclarant qu'il méprisait d'aussi plates accusations, s'étendit sur la mission civilisatrice du comédien. Puisque le théâtre était le foyer de l'instruction nationale, il votait pour la réforme du théâtre ; et, d'abord, plus de directions, plus de privilèges!

---- Oui ! d'aucune sorte !

Le jeu de l'acteur échauffait la multitude, et, des motions subversives se croisaient.

---- Plus d'académies ! plus d'Institut !

---- Plus de missions !

---- Plus de baccalauréat !

---- À bas les grades universitaires !

---- Conservons-les, dit Sénecal, mais qu'ils soient conférés par le suffrage universel, par le Peuple, seul vrai juge !

Le plus utile, d'ailleurs, n'était pas cela. Il fallait d'abord passer le niveau sur la tête des riches ! Et il les représenta se gorgeant de crimes sous leurs plafonds dorés, tandis que les pauvres, se tordant de faim dans leurs galetas, cultivaient toutes les vertus⁽¹⁴⁾.

「ここは、わたしに言わせて欲しい！」とデルマールが叫んだ。

彼は演壇に飛び上がり、みんなを押しつけて、お決まりのポーズをとった。そして、いま聞いたような浅薄な議論は無視すると表明しながら、俳優の文化的使命について長々と述べた。劇場は国民教化の中心だから、劇場の改革について賛成である、で、まず、さまざまな指揮管理、さまざまな特権を廃止すべきだ！

「そうだ、どんな類のものだって廃止だ！」

役者の演技が聴衆を興奮させ、破壊を唱える動議が行き交った。

「アカデミー廃止！学士院廃止！」

「布教伝道の廃止だ！」

「大学入試の廃止！」

「大学の学位なんて、やめちまえ！」

「そいつは残しておこう」とセネカルがいった、「ただし、普通選挙によって、唯一の真なる裁き手である人民によって授けられるようにしなければ！」

それに、いちばん有効なのはそんなことではない。まず、金持ちの頭を打って平均化して

(14) *Ibid.*, pp. 455-456.

しまわなければならぬ！そして、彼は、黄金張りの天井の下で犯罪的行為を満喫している金持ちの姿を描いてみせ、その一方、貧乏人は、屋根裏部屋で飢えに身をよじらせながら、あらゆる美德をまもり育てているとした。

ここまで、要約と引用を含めて見てきたように、ひとつの言説が現われては中断され、また次の言説が現われては中断されてしまい、さまざまな言説が乱立するという、言説のインフレーションという現象を見て取ることができる。そして、この言説のインフレーションという事態は、「そうだ、どんな類のものだって廃止だ！」という台詞の「どんな類のものだって」という、何でもかんでもあらゆるものを対象とし巻き込んでゆくインフレーション現象と相同的な出来事である。また、セネカルの「金持ちの頭を打って平均化してしまわなければならぬ」という言葉に窺うことができるように、言説もまたインフレーションによって、「平均化」されなくてはならないという、まさしく「平均化」＝「紋切型」という現象へと導かれていくのである。

つまり、この事態によって明らかになるのは、これらさまざまな言説が紋切型と化す、ということである。先の引用で見たように、革命の到来を、神の支配による時代の到来になぞらえようとする言説、キリスト教がすべての土台であるとする言説、「市民諸君！」という言葉で語り始めようとする言説、あらゆる制度の廃止を唱える言説、さらにはその廃止に留保を付けつつも、大切なのは民間投票で、それも「唯一の真なる裁き手である人民」によってなされるべきだとする言説、金持ちと貧乏人を対照する言説、これらどの言説も、インフレーションの過程で、あらゆるものを「平均化」してしまおうとする言説なのであり、つまり紋切型化してしまうという現象が生じることとなり、「知性クラブ」において、紋切型の連鎖を認めることができるのである。あるいはまた、言説のインフレーションという事態と同時的な事態として、言説における紋切型の蔓延という事態を指摘することもできるだろう。そこでは、自らの言葉で語っていると感じているとき、じつは口から洩れる言説は他者の言葉である紋切型で構成されているのであって、この紋切型が、社会によって作り上げられた実体を欠いた社会的なイメージの産物であり、ゆえに物語である以上、他者の言葉である紋切型によって構成される言説は、その意味で、フィクション性を、ある種の虚構性を纏わざるをえないのである。真実の反映としての語るのではなく、真実を欠いた反映そのもののたわむれの類似によって保証される、それとは気づかれぬ偽装された真実性といったものによって形成される紋切型はだから、モデルを欠いたコピー同志による同化を煽る「平均化」の磁力にさらされており、そこにおいて、他者の言葉で形成される紋切型は、実体を欠いた集团的イメージとして流通する虚構である。そして、その虚構は虚構と意識されることなく、互いに知っていることをうなずき合う雰囲気だけが、偽の真実性として漂うことになるのである⁽¹⁵⁾。

(15) ここにおける考察は、蓮実重彦『物語批判序説』（中央公論社、中公文庫、1990年）の論考を参考にしている。

3. おわりに

ここまで、制度の虚構性、言説の虚構性について分析してきたが、『感情教育』という小説においてフローベールは、一般的に正当なる根拠を持つものとして自明視されている制度や言説が、いかに虚構性に満ちたものなのかということを指し示した。『感情教育』の舞台となったこの虚構性に満ちた時代を、フローベールは友人への手紙のなかで、「ほら話の時代」(le temps de la blague)と呼んでいる。「ほら話の時代」を扱っているこの小説が、確固たる正当性をもつものと一見みなされているものが、実はフィクショナルなものであるということをあぶりだしているのは論述したとおりであるが、その先にはさらに、そのフィクショナルなもの対になるリアルなものとは何なのか、これから問われなければならないだろう。この小説におけるフローベールのリアルについては、稿を改めて、また論じてみたいと考えている。